イネ縞葉枯病に注意

【背景・目的・成果】
1980年代に流行したイネ縞葉枯病が、再び猛威をふるい始めています。本病はウイルス病で、ヒメトビウンカによって媒介されます。小麦で虫数が急増すること、小麦における保毒虫率（6月）が県西部で高まっていること、水稲における保毒虫率（8月～10月）は小麦よりさらに高まることなどが明らかになりました。

イネ縞葉枯病の症状

田植え直後の感染
ゆうれい症状

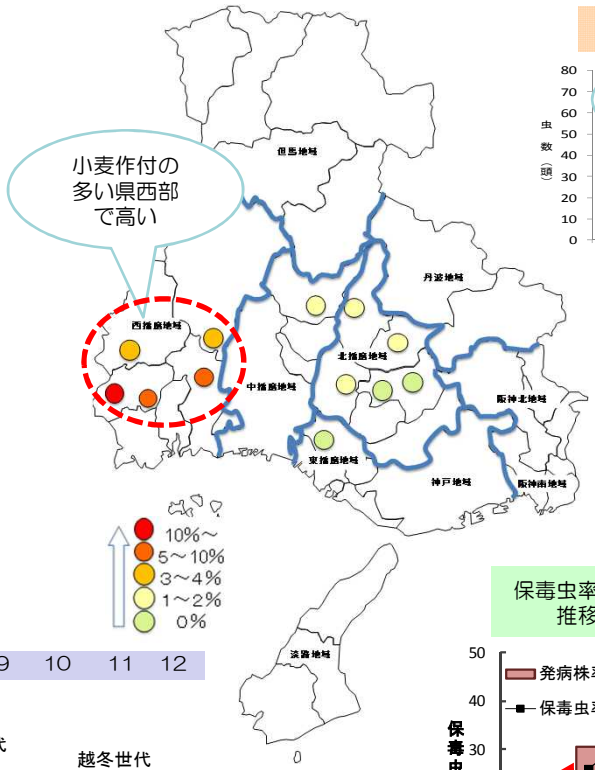
幼穂形成期の感染
穂の出すくみ

ヒメトビウンカ

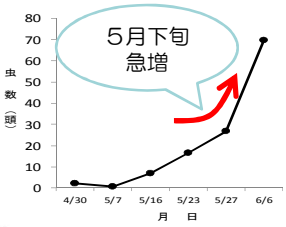
成虫（メス）

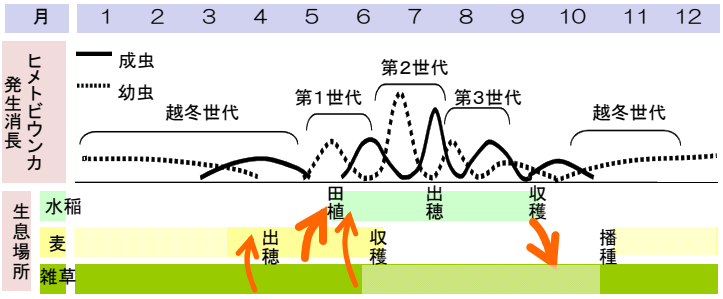
成虫（オス）

小麦（6月）における保毒虫率

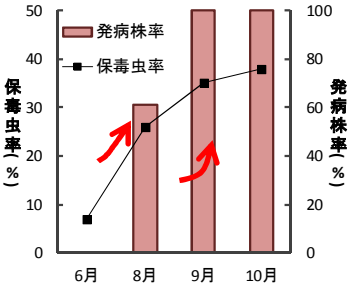


虫数推移（小麦）





保毒虫率と発病株率の推移（水稲）



【防除のポイント】
1. 小麦ほ場で、ヒメトビウンカを防除することにより、水田へ移動する虫数を減らすことができます。
2. 水稲の育苗時に殺虫剤を施薬することで、7月頃の発病（ゆうれい症状）を抑えることができます。また発病株は、速やかに抜き取ります。
3. 畦畔雑草を管理することで、ヒメトビウンカの越冬場所をなくして翌年の虫数を抑えます。

【技術の活用】
米の安定生産につながるよう、栽培指導を行う関係機関に、イネ縞葉枯病の発生状況、ヒメトビウンカの保毒虫率・密度などについての情報を提供します。

兵庫県
Hyogo Prefecture
兵庫県立農林水産技術総合センター
農業技術センター